

暮らしの中の詩の心 高田敏子

詩は、まず「楽しませるもの」だと思えます。言葉から生まれるイメージで「楽しむ言葉」を提供してくれるものだと思うんです。

私は楽しさという言葉で単純に言ってしまうすけれども、パツと心が輝くような、そういう楽しさを与えるものが詩だと思えます。

私達は楽しさがないと生きてゆけません。淋しかったらとってもし生きられないし、同じ事を毎日毎日ただ繰り返していても、とても生きられせんわね。三日も同じ洋服、着てられないわねえ。皆さんもそういう事ないかしら。おしゃれというのは、人よりはやっぱり自分が自分を喜ばせる楽しみ、そしてそれは、同時に人をも喜ばせて、その喜びをまた自分がもらうためにあるわけですね。詩は言葉の芸術ですから、その言葉で喜びを与えるものだと思うんです。

詩を書こうっていうと、何かすてきな言葉はないかっていう人がいますね。詩を書きたい、何かすてきな言葉はないか、すてきな詩のできる言葉はないか、っていう方があるけど、すてきな言葉なんではないわけです。すてきな言葉をつくるのではなくて、自分が気が付いた事があったならそれがすてきな言葉になるわけですね。

詩を書く時、星とか花とか書くと詩だろうと昔は思っていたんで

す。美しいのは花が見せてくれるわけですね。「花は美しい」って書いても当たり前で、感嘆詞だけですわね。さらに何かそこに付け加えなければならぬ。こっちがよく見た言葉を添える時、その見方が自分自身の魂を喜ばしてくれる言葉を発見できた時、私は、それが詩になるのだと思えます。

言葉っていうのは、とっても暖かいやさしいものです。お互いに呼びかけ合う言葉。言葉は呼びかける時にとてもやさしくなります。ですから詩はある意味では呼びかけなんです。呼びかけであると同時にその相手をほめてあげる。どこがいいかこっちが一所懸命見つけてあげるってわけですね。その言葉が美しい言葉になるのだと私は思うんです。形容詞でかざるから詩が美しくなるわけではなく、呼びかけてあげる、それから相手の良さを見つけてほめてあげる、それを文字にした時、それを読む人がその言葉を美しく感じるんだと私は思います。

私は優しい人間ではないけども、詩を書こうと思った時に相手を一所懸命見て、いいとこを一所懸命捜してあげる、やさしい心にならない限り詩にならないってことがわかったんです。だから、いい

詩というものを読んでみますと、必ず相手をたてて、そして相手の良さを認めている言葉が必ず入っているんですね。ここで、「ふるさとの川」という詩を読んでみます。八木重吉の詩です。

ふるさとの川よ

ふるさとの川よ

よいおとをたててながれているだろう

母上のしろい足をひたすこともあるだろう

これだけの詩です。でも私、この詩とても好きなの。まず、「ふるさとの川よ」と呼びかけるのが、とても優しいですね。やはり相手への呼びかけという言葉は、やっぱり美しいんです。この詩には、何にも形容詩は入っておりません。どんなに美しい川かなんていうことを書いてもいません。ひとつひとつは、特に飾りたてた言葉があるわけではないんです。ふだんはふるさとの川なんて忘れていることが多いわけですが、でも、「ふるさとの川よ、ふるさとの川よ」と言われただけで、だれでも自分のふるさとの川を味わうことができるわけですね。そういうふうに言葉というのは、忘れていたもの思い出させてくれる、すてきな役目もあるわけです。

ですからこの「ふるさとの川よ、ふるさとの川よ」というだけでも、人の心にある目覚め、ある思いを運ばせる、その方の心をふるさとに連れていってあげる、すてきな言葉が入っているわけです。で、そのあとに「よいおとをたててながれているだろう」というふうに、川のもっている部分の最もいいところをほめて認めているわけですよ。そしてその上に、「母上のしろい足をひたすこともある

だろう」。これも川を立てて「川よ、あなたが流れてお母さんの足をひたしてくれていることもあるのね」と言ってるんですね。「お母さんは、白い足を洗っているだろう」じゃないんです。だから、

ふるさとの川よ

よいおとをたててながれているだろう

母上はしろい足を洗っているだろう

だと、この一行がガクッと変な味になるんですけれども

母上のしろい足をひたすこともあるだろう

「川よ、あなたが、母上の足をひたしてくれているのね」と、川への感謝の心が入ってるんです。ですから、こういうふうに説明していくと、詩の良さというのは、言葉で飾りたてている良さではなくって、相手を立てる言葉の良さだということをおもいますね。私がお話する以外にもいろいろな詩がございませうけれども、でもその究極は、相手を認める心がそこに入っていることだと思えます。

いい詩を読むと、私、自分の詩を読むのがいやになってしまいうんですけれども、やさしい詩を読みます。これは中学生が歌うために、もう何年前か前、NHKの依頼で書いて、岩川三郎さんが曲をつけてくださったものです。中学生のための詩を頼まれるときって、テーマに困るんですね。でもそのときフーッと「お母さん、お母さん」と言いながら私たちは育ったことに気がつきましたので、それをただ言葉にしてみました。「いち日に何度も……」という詩です。

お母さん

いち日になんどもあなたの名を呼んで

月日は流れる

小さな悲しみも あなたに告げて

小さなよろこびも あなたに告げて

私たちは育った

お母さん こおろぎが鳴いている

もう 秋なのね お母さん

お母さん

いつどこにいてもあなたを思っ

時が流れる

いつかやがて おとなになる日が来ても

いつかやがて 離れて住む日が来ても

私たちは甘える

お母さん 背くらべしましょう

美しい秋の空 お母さん

こういう詩です。私はまた、縫い物が好きで、ときどき針仕事をします。これは、東京新聞に毎週書いていたときの詩です。毎週詩を書くっていうのは、かなりたいへんなことで、何でも一所懸命見て、そのとき目についたものを一所懸命言葉にする、何でも心にとまったらばそれを言葉にしてきたわけです。で、これは縫い物してたときに、針がキラッと光る、それだけが目についたものですか、詩にしてみました。「針は銀色」っていうんです。

陽当りのよい縁側に坐って

久々に針を運んでいる

針は銀色

針は銀色

歌のように心にくり返しながら

針の光をたのしんでいる

糸を布目にくぐらせる

この小さな道具の

愛らしい働き

一目一目を小さく進んで

小さな一目をくぐりぬける度に

針は きらりっと

陽をうけて光ってみせる

こんな詩です。皆さん針仕事をなさるかどうかわかりませんが、針がキラッキラッと光るときに、「まあきれいなね」と、お思ひになっているのだらうと思います。私の友だちが新聞に出たのを読んで、すぐ電話くれました。久しぶりで女学校の友だちが、「あの詩読んだら私今日また針仕事したくなって、今してるのよ。針が一目一目キラッキラッと光るの。うれしいわ。」って言うってくださいました。私の詩はたいした詩じゃないけども、そういう小さな、ふだん気がつかないことに目をとめて、そのいい部分をちよつと言葉にする、ということをやっているわけです。

私の合唱組曲に、「嫁ぐ娘に」というのがあります。私の娘がお嫁に行くとき、ちょうど婚約が整った頃に、初めて「合唱組曲を書いてみませんか？」とおっしゃっていただきました。私はとても書

けると思わなかったんですけれど、とにかく書いてみたんです。

「嫁ぐ娘に」は、最初に気取ったものを一所懸命書こうと思つてもだめでした。それで、気がついたのは、うちの娘が婚約の指輪をはめて、キラッキラツと眺めるのを楽しんでる姿が目についたんですね。その子は長女でしたから、本当に戦後の貧乏なときに育つたので、ろくに指輪も買つてやりませんでした。ですから、長女にとつては初めての光る指輪、小さな小さなダイヤでしたけれども、光る指輪がとつてもうれしかったんですね。で、私はそのとき「この子はぜいたくをさせてこなかったから、だから逆に小さなダイヤモンドをこんなに喜んでる。かえつてそれはよかったのね。もっとぜいたくして大きなダイヤモンドでもするよな身分だったら、きっとこの子はバカにして、あの人はけちよ、こんな小ぢなこんなダイヤ」なんて言うかもしれないけど、指輪もはめてやれなかったことは、かえつて婚約の指輪をすてきなものにしたんだな」と思ったんです。で、そんな娘のことを書きました。

五つに分かれていてちよつと長いんですけれども、皆さんはこれからお嫁にいらっしゃる方たちですから、皆さんにさしあげるつもりで読みます。最初にちよつと説明しますが、うちの娘は、私が結婚してすぐ、満州に行つて生まれました。ですから北の寒い寒い零下三〇度つていうときに生まれたので、一番は指輪、二番はその娘の生まれたときを書いて、三番は戦争を書きました。やっぱり戦争というのはどうしても書かなければならないことですね。私が戦争中いちばん思ったことは、大人の手、男の手、すてきな男性の手が、全部殺人に使われてしまうことですね。そして、すてきな男性たちはみんな戦場へ行つて銃を持ちつたり、戦車を運転する。とにかく

人を殺すための手になつてしまふわけで、私たち残つた者は老人と子供と女で、防空壕を掘るにも女の手、老人の手、そして重たいものも何もとにかく女の手だけしかなくなつてしまふわけです。ですから私が戦争のことを思うと、手、男の手がみんななくなつちゃうことが何て寂しかったかしら、と思うわけです。四番は、平和な時を書いて、終わりは、娘のかどでという題にしたわけです。

それからもうひとつは、戦争中つていうのは会話がなかったんです。「人びとに言葉はなかった」つて歌詞に入れてあるんですけれども、この間歌つてくださる方から「どういうことですか？」つてきかれましたね。今私たちはいろんな会話をもっています。でも戦争中は「おいしいもの食べたいわ」なんて言つたら、「いけません！」と怒られるし、「きれいな花ねー」つて言つたら、「のんきなことを言つて」なんて言われるわけで、ただ「今日は空襲があるかしら」ぐらいしか言葉はなかった。つまり、会話というものがあったんです。では、「嫁ぐ娘に」。

一 嫁ぐ日は近づき

嫁ぐ日は近づき

むすめの指に

あたらしい指輪

陽にかざし

花を摘み

きらめく指輪

あたらしい指輪

嫁ぐ日ま近く

むすめの心に

あたらしい星

新しい星くるめき

むすめを導く

美しい未来のほうへ

その星のまたたき

母を誘う

過ぎし日の 思い出のなかに

二 あなたの生まれたのは

遠い北の国の
古い絵のような町で
娘 あなたは
吹雪の音といっしょに生まれ

た

わたしはおのき
痛みにあたえ 待っている

三 戦いの日々

やめて！ やめて！
世界中の町と村で 母と子は
叫びつづけた
焦げくさい空に手をさしのべ
て

空にはやさしい月も星もなく
人びとに言葉はなかった
木も草も黒くただれ
ぼろぼろの命だけがはいまわ
っていた
やめて！ やめて！

四 時間はきらきらと

祈っている
苦しみの時はすぎさり
町の吹雪しずまり
夜あけを告ぐるソリの鈴 近
づき

やわらかな生命
あなたは 生まれていた

五 かどで

きらきらと時間ときは流れる
時間は光って流れる
たわむれ遊ぶ母と子のまわり
を
ブランコ 光をよぎり
ふんすいは歌いつづけ
時間はきらきら

窓を閉しても 木々の葉はさ
さやかかけ
灯ともりを消しても心には灯がとも
っている
過ぎてきた月日のよみがえり
ささやき

白いドレス 明日のよそおい
の娘よ さようなら
オムレツ作りの上手な娘よ
さようなら
うれしいときもすぐ涙ぐむく

こんな詩です。長い時間聞いてくださってどうもありがとうございます。
（文芸学会講演の一部を筆記し永松康子・矢野久美子）

よりそう恋人たちのまわりを
木もれ日は肩にゆらめき
サルビアの花 燃え
きらきらと流れる時間は
若妻のまわりにも
真白きエプロンの朝
その指にレモンの香り

せの娘 さようなら
かくれんぼの大好きだった
いたずらっ子 さようなら
ままごと電話でおねだりした
甘えっ子 さようなら
吹雪の夜には寝つかなかった
赤ん坊 さようなら
そのほほえみを 娘よ
やさしいひとみ
愛の心を

いつの日にも忘れることなく